今治歴史散歩

大成経凡

第十回　桜井漆器の由来と椀船行商

今治の埋もれた、魅力ある歴史文化を紹介するコーナーです。第十回は、伝統工芸「桜井漆器」の由来を紹介し、これと密接にかかわった椀船行商の足跡を歴史散歩したいと思います。

●桜井地域、天領となる

桜井漆器の歴史はそんなに古くなく、江戸時代後期の天保年間（一八三〇～四三年）頃に産地の基礎が出来上がったようです。誕生の背景には、当地域で盛んだった廻船活動が大きく影響し、他産地とは異なるユニークな成立過程が見られます。

大きな転機は、明和二（一七六五）年に越智郡・桑村郡のうち一八カ村・一万石が、松山藩領から天領に編入されたことです（五〇年後、幕府は管理を松山藩に委託し、松山藩預地となる）。このとき、越智郡で天領となるのは桜井・長沢・孫兵衛作・旦・登畑・宮崎・朝倉下・朝倉上之村（朝倉上村の一部）の八カ村で、これらを支配する陣屋が桜井村に置かれました。

この結果、桜井村は町方支配となり、天領一万石の経済特区に生まれ変わります。桜井の旧市街に残る旭町・常盤町などの地名は、その名残を物語っています。八カ村の年貢は、いったん桜井の御用蔵に運ばれ、桜井港から天領の別子銅山（鉱夫食糧）へ船積みされたようです。

椀船が出港した桜井河口港（干潮時に古い石波止が姿を見せる）

●商人の寄進石造物

綱敷天満神社（新天神）のある志島ケ原には、江戸後期以降に寄進された鳥居・狛犬・灯籠・玉垣などの石造物が多く残されます。松山藩主・久松松平家が先祖を菅原道真としたことで、同神社は藩の庇護を受けますが、寄進者の多くは今治地方の商人です。西口鳥居付近に建つ高さ約五・八メートルの石造灯明台は、幕末の今治藩廻船御用商人・柳瀬義富が寄進したものです。

伊予商人以外では、文化一五（一八一八）年に紀州黒江椀折敷問屋が寄進した灯籠が衣干岩の前にあります。紀州黒江は、現在の和歌山県海南市にあたり、今も漆器の産地で知られます。また、嘉永五（一八五二）

黒江椀折敷問屋の寄進灯籠
（菅原道真伝説の衣干岩そば）

伊万里陶器屋仲間の寄進灯籠
（新天神の絵馬堂そば）

年に肥前伊万里陶器屋仲間が寄進した灯籠が絵馬堂の前にあり、これは同神社の九五〇年祭に合わせて贈られたものです。肥前伊万里は、現在の佐賀県伊万里市で、陶器の積出港で知られました。どうして、これらの地域の商人が桜井と結びつきがあったのでしょう。

●椀船行商の足跡

当時の海上輸送業は〝買積方式〟といって、どこで何を積み、どこへ運んで売るかは、船頭の商才に委ねられていました。桜井商人が黒江に姿を見せるのは宝暦・明和年間（一七五一～七一年）頃とされ、黒江が漆器産地として伸長を見せようとした時期と重なります。漆器の原材料・荒木地が大量に求められ、これを桜井商人が運んできたようです。さらに帰りは漆器を買い入れ、九州・中国地方などへ回漕し、西国方面における黒江漆器の販売シェアを独占するほどでした。黒江では、度々訪れる桜井商人の対応に困り、伊予問屋を指定してこの商談窓口としています。

彼らが逞しかったのは、船を寝床・商品倉庫として、寄港地から天秤棒をかついで行商に練り歩いたことです。この漆器を回漕した船のことを、今治地方では「椀船」（椀舟）と称します。彼らは伊万里にも寄港し、陶器を買い入れて上方方面などへ売りさばいたようです。寄進灯籠の意匠性や大きさからすると、陶器屋仲間にとっては上得意様だったことが想像できます。

こうした背景もあり、やがて簡易な漆器製造が桜井でも始まり、産地の基礎が形成されていきました。明治五（一八七二）年の統計資料には、すでに桜井で漆器の製造と行商を行うものが多いと記され、村が所有する船七七隻のうち三二隻が商船（他は漁船）です。この商船は、五〇石積以上が二四隻・五〇石以下が八隻とあり、これらの多くが椀船と思われます。

小谷屋松木家所蔵の椀船航海絵日記（明治四・五年）には、宇和島と熊本へ行商に出掛けた内容が記され、乗船員六名のうち五名が売り子（販売員）でした。桜井から宇和島へは片道一一日、熊本へは約一カ月の航海を要しています。これは、風待ち・潮待ちに頼る当時の帆船航海を物語っていて、大変興味深い資料です。実際、同家が所有した神力丸を、〝日本一の船匠〟と称された和船大工・野田房吉が、船模型に復元しています。やがて、これら売り子の中から月賦販売を行うものが現れますが、それは明治後期以降のこととなります。

野田房吉制作の椀船模型（井野屋河上家所蔵）